

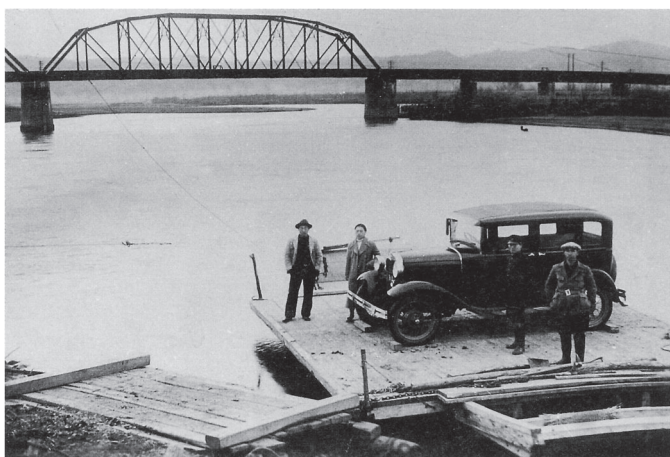
川を渡るための舟

橋がない時に川を渡るには、歩いて渡るか舟＝渡船を使います。

古来、アイヌたちは川を丸木舟（チブ）による「道」として利用していました。やがて和人が海沿いを移動するため、街道の整備とともに「渡船場」が整備され、川を渡る時にはチブが利用され、明治時代、内陸に和人が入り始めたころも利用されました。

やがて人が増えて農業や商業が盛んになるにつれ、大きな舟が造られるようになります。大正時代には人30人と馬車3台を一度に運ぶことができる渡船も現れました。

十勝川をはじめ、十勝の川に多くの渡船場が設けられ、渡船は多くの人の足となって活躍しました。



十勝川千代田渡船場の渡船。渡船は人だけでなく、馬や馬車、自動車も運んだ。千代田渡船場は明治25年に武山土平が開設した「私設武山渡船場」から始まった。（後ろは千代田の鉄道橋）

ロープと流れを利用して渡る

元々は櫓や櫂、それに竿などで舟を操っていましたが、やがてワイヤーロープが川に渡されてそれを手繰るようになり、大きな舟を利用するために舟をロープに滑車で繋ぐこともありました。ただし、人力でロープを手繰るだけでなく、川の流れに対して舟の向きを調節することで舟が対岸に向かうようにする技術が必要でした。

やがて十勝川、利別川など大きな川にも橋が架かるようになって（現在、十勝川だけで25橋＝シイ十勝川を含む）渡船は姿を消していき、平成4年、最後の渡船であった旅来渡船（旧国道336号の一部）が、十勝河口橋の完成とともにその役割を終えました。



旅来渡船



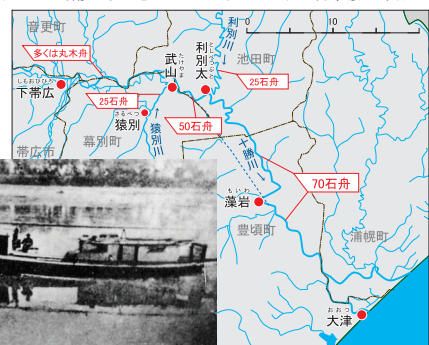
十勝にあった主な渡船場（川は明治29年発行の地形図に基づいている）

川舟による「運送」もあった

アイヌ文化期から（あるいはそれ以前から）川は「幹線道路」として利用されてきました。

明治時代になり開拓が始まってもそれは変わらず、明治26年には三浦等六が木材や荷物の川舟運送資格を取り、大津～利別太間の運送を始めました。入植者が増え川舟運送は発展して大津～十勝川には大津から下帯広まで5つの船着き場ができました。

しかし鉄道（釧路線）の整備が進むことにより（全線開通明治40年）、明治四十年代にはほとんどの川舟運送が廃止されました。



地図は十勝川の船着き場。写真は五十石舟

